

難産・死産に備える

正常産と異常産（難産・死産）の見極め

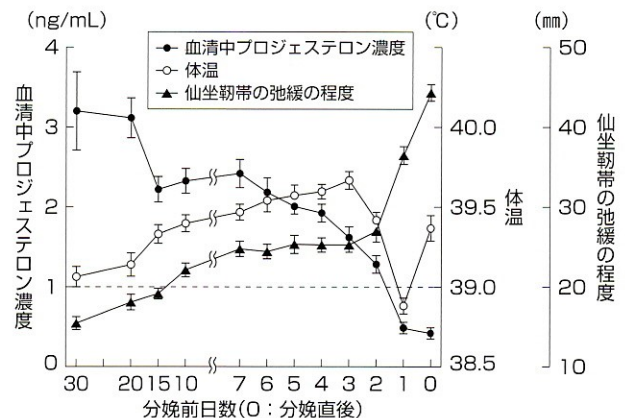
石井三都夫 (株)石井獣医サポートサービス 代表

はじめに

正常産とは、牛が自らの力で自然分娩し、子牛が無事生きて産まれる分娩をいう。難産とは、自然分娩に対し、人為的な手助けなしでは娩出が困難、あるいは不可能な分娩の状態をいう。難産で産まれた子牛は、正常産の子牛と比較し、出生後の疾病罹患率や死亡率が高く、母牛の繁殖成績も低下する¹⁾。一方、分娩の難易にかかわらず、結果的に子牛が死んで産まれた場合(見つけたときに死んでいた牛も含める)は、死産という。これらの難産・死産は異常産であり、畜産農家にとってきわめて重要な経済的リスク要因の1つである。本稿では、目の当たりにする分娩が正常産であるのか、難産あるいは死産になり得る異常産なのかを見極めることを目的として、見極めに必要な項目について整理したい。

分娩の兆候と予知

異常産を予防、早期に発見するためには、分娩予定日が近づいた牛群のなかで、どの牛が次に？いつ？分娩を迎えるのかを予知することが求められる。分娩兆候には以下の項目があり、これらの変化を確認して分娩を予知する。



分娩前日に体温は急激に下降し、仙坐靱帯の弛緩は急激に進む。文献2より引用

図1 分娩前の体温、仙坐靱帯の弛緩および血清中プロジェステロン値の変化

1. 乳房、乳頭および外陰部の外見変化と乳汁変化

分娩1カ月前頃より乳房が腫脹しはじめ、乳頭も腫脹し乳頭内に液体の貯留を認めるようになる。外陰部の長さは増し、陰唇の幅も増大する。乳房や乳頭および外陰部の変化は個体差が大きく、分娩予知の目安にはなるが、分娩開始の判断材料としては個体差が大きいため困難である。

2. 仙坐靱帯の弛緩

分娩が近づくと仙坐靱帯が弛緩し、尾根部の両側が軟化し陥没する。この窪みの深さを測定することで、分娩予知に利用することができる。前日より仙坐靱帯